

ラグビーとイギリス資本主義

——スポーツと歴史・社会——

内 海 和 雄*

はじめに

スポーツは人類の歴史と共に存在してきた。その時々の子会の必要性に支えられて生まれ、その必要性を満たしながら社会に働きかけてきた。スポーツないしゲームは世界のすべての地域に存在した。資本主義社会はスポーツが全面的に開花した時代だが、特にラグビーやサッカーなどのチームスポーツが歴史上初めて誕生した時代でもある¹⁾。

本稿ではラグビーの歴史をイギリス資本主義の中に位置づけ、スポーツと歴史、社会との関連を検討する。ラグビーの180年弱の歴史はこの課題に最適な素材である。資本主義の視点として、産業革命期の「分業と協業」からの要請、大英帝国期の人材形成要請、アマチュアリズム(階級差別)²⁾、女性差別³⁾、植民地政策、人種差別、ナショナリズム(ブリティッシュネス)、市場化・商業化、プロ化、そしてスポーツ・フォー・オールなどをラグビーの変遷の中で展開する。

1. チームスポーツ誕生の概要

先の拙稿で触れたように、イギリスは19世紀には世界を実質的に繋ぎ、「世界史」を形成した。それはE・ホブズボームの言うように「世界の唯一の工場、その唯一の巨大な輸出入業者、その唯一の運送業者、その唯一の帝国主義者、そのほとんど唯一の海外投資国、そしてそれ故

にその唯一の海運強国、真の世界政策を持つ唯一の国と呼んでよいような時期が、世界史にはあったのである。」⁴⁾これが大英帝国である。そして産業革命が完成し、大英帝国の絶頂期に入るとこれまでの野蛮な民俗フットボールを刷新してラグビーやサッカーなどの近代化されたチームスポーツを誕生させた。これは「近代スポーツの第2期」である。A・ヴォールは貴族も一緒に楽しんだクリケットやより安全にグローブを付け始めたボクシングなどの「近代スポーツの第1期」を「ジェントルマン・スポーツ」、そしてチームスポーツを「ブルジョア・スポーツ」と呼んでそれぞれを識別し、その社会背景の違いを指摘した⁵⁾。

ところで、1800年前後にはデンマーク体操、スウェーデン体操、そしてドイツ体操が、労働形態と軍事行動の分析と解剖学などを基盤として、「労働技術学の明確な影響を受けて」意図的に創造された⁶⁾。一方、産業と社会、大英帝国の諸要請に応える文化としてそれらを最も現実的に実現する手段として、民俗フットボールの刷新を重ねながらラグビーやサッカーが徐々に形成されたのである。この点でそれは発明(Invention)ではなく刷新(Innovation)である⁷⁾。

産業と社会の「分業と協業」は主にチームスポーツのメカニズム面を規定した。つまり個人の技術、技能の高度化、体力の向上と同時に競技様式の形成、チーム戦術、組織力、編成力、統合力、スピード化、遊戯化、興奮の高揚などである。そして大英帝国の要請とは集团的行動

* 広島経済大学名誉教授

に伴うナショナリズム、リーダーシップなどの精神面、イデオロギー面である。強靱な心身、規律と統制の取れた思考と行動、リーダーシップそして愛国心である。

また当時の交通機関についても触れておきたい。1840年代の産業革命は完成期を迎えていたが、狭い運河や荷馬車などの交通は産業や社会の必要性からかなり立ち後れていた。だから、徒歩あるいは馬である場所にどれだけ早く着けるかなど、懸賞付きの競走、競馬、ボート競技会が催されたりした。資本主義の特性である競争性はより迅速な社会への要請として、競争に対する人々の素朴な関心に強く影響したのであった。そして1840年代はイギリス国内だけでも9,600 km (6,000 mile)、そして1850年の段階で12,000 km (7,500 mile)に及ぶ鉄道網が張り巡らされ始めた⁸⁾。それは電信の発展を伴い、イギリスの情報量と処理能力は一気に向上した。それと同時に人的交流も向上した。工場の生産過程ばかりでなく、販売における競争は資本主義の根本であり、競争への思考は自然発生的なものではなく、その時代の根底に横たわる競争の実態と諸要求に影響されて生じたものである⁹⁾。こうしたより迅速な運送手段の必要性やそれに規定された人々の競争観を鉄道は満たしたのであり、それを通して地域間の輸送量は大きく飛躍し、人的、情動的交流は一層促進された。産業革命でそれぞれに発展した都市同士のライバル意識 (Localism) が、サッカーやラグビーの対抗戦を通して一層高揚し、それはまたサッカーやラグビーの更なる普及をもたらした。そうした競争は資本主義における資本自体の本性であるから、より競争性に富みかつ組織性を持つ、新たな運動文化が社会的に求められのである。

1840年代に意図的に刷新されたサッカーやラグビーはアマチュアリズムによって主に中産階級に独占された。その点からいえば「創られた

伝統」¹⁰⁾の一つである。19世紀のエリート教育で最も著しい特徴は、ゲーム、スポーツの地位の変化であった¹¹⁾。

ところで、ラグビーやサッカーのチームスポーツがその後のイギリス国内で、そして世界になぜ普及したのかは後に検討するように、第1に、ルールが確立され、競技の様式が明確になったこと、それに伴って行動のしかた、役割も明確化した。第2に、競技の戦術が求められるとともに、個人と集団の役割が明確化され、技術上達の目標が具体化された。第3に、野蛮、無法なものからより秩序をもつことにより、一定の安全性が確保されたことで参加頻度も高くなり、教育手段としての価値が増した。それゆえ、パブリックスクールでの教育方針にとって絶対的な位置を占めるまでになった。第4にチームスポーツの面白さと興奮度は当時の社会の要請に適應し、飛躍的に普及した。

2. サッカーの誕生・変遷

サッカーとラグビーは1840年代のほぼ同時期に生まれた。本稿ではラグビーが中心となるので先にサッカーを検討する。

2.1 サッカーの誕生

サッカーは1847年にパブリックスクールのイトン校で、ラグビー校でのラグビールール化に2年遅れて作成された。その違いはE・ダニングによれば次の2点である。

- ・ボールをつかんだり、手で持って走ったり、投げたり、手で打ったりしてはならない。
- ・ゴールポストは地面から7フィートの高さで、ポスト間の距離は11フィート。ボールを蹴って2本のポストの間を通った場合にゴールが得られる。ただしキックはバー(横木)の上を越えないものとする¹²⁾。

民俗フットボールの中のハッキング(脛蹴り)¹³⁾やハンドリング(ボールを持って走る)

などが禁止された。(飛んできたボールを手で取って下に置くことは認められた。) オックスブリッジでは1860年代以降新興パブリックスクール出身の学生が増えるにつれてラグビーとサッカーの整理が必要になり、ケンブリッジ大学関係者を中心に1863年にルールが合意されて、フットボール協会 (Football Association: FA) が設立された。(Association から Soccer と呼ばれるようになった。) 全13条で、コートやゴールポストの広さなどの第1条以下、ボールを持って走ることの禁止 (第9条)、トリッピング (足の引っ掛け) やハッキング禁止 (第10条) そして靴への金具などの装着の禁止 (第13条) を規定して、ラグビーとの相違を明確化し、より安全化した。1871年には FA Cup が創設され、1883年の決勝戦は労働者主体のチームであるブラックバーンオリンピック (Blackburn Olympic) が、貴族階級を基盤とするイトン校 OB クラブのオールドイトニアンズ (Old Etonians) に勝利した。これ以前から労働者選手の参加による「休業補償 Broken-time Payment」問題は争点となっていたが、1885年7月にはアマ、プロのオープン化が正式に承認された。これによりアマである貴族層の多くがラグビーへ転向した。もはやプロには技術的、体力的に対抗できないこと、労働者主流への反感が高まっていたこと同時に、ブルジョアジーとの関係が大きく接近していたからである。

2.2 サッカーはなぜ、プロ化を許したのか

サッカーがプロ化を容認した理由は次のように考えられる。

2.2.1 貴族のノーブレス・オブリッジ

サッカーを産んだイトン校や伝統的パブリックスクールの卒業生の多くが進学したオックスブリッジは貴族的出身者が多く、彼らは数十年前までは近代スポーツの第1期である民俗ゲームに労働者とともに参加し、あるいはそれ

を後援した経緯がある。そしてノーブレス・オブリッジ (Noblesse Oblige: 高い身分に伴う徳義上の義務) は労働者階級に対して寛容さを持っていた。そればかりでなく、貴族の属したクリケットクラブでは、プロとしての労働者 (未だ封建制の召使的立場) も参加してきた歴史があり、プロを統制することには馴れていたし、自信を持っていた。プロは人数調整の要因であり、貴族の身の回りの世話を焼きながらの参加であり、何かと差別されていた。プロはアマである貴族を「サー」と呼び、競技場では貴族は姓の前に名を表記されたが、プロは姓の後に名が表記されプロであることが明示された。またパビリオンからフィールドへの出入口や更衣室もアマとは別のものを義務付けられた。競技の中でボウラー (ピッチャー) は主にプロが担った。負担の大きかったことと、もし貴族であるアマが投げるボールを召使のプロにめちやくちやに打たれることは階級的プライドを危うくさせたからである。遠征では格安の鉄道、ホテルを宛がわれた¹⁴⁾。こうして未だ封建制下の貴族と家来の関係に近かった。しかし新たなプロは近代的な労使協定のもとに資本家に雇用された労働者である。

2.2.2 教会、企業家も推奨

サッカーのルールはラグビーに対して簡易であり、更に競技での怪我も当時のサッカーは荒かったがラグビーに比べて少なく、次週の労働に大きな支障は少なかったので労働者階級には参加しやすい種目であった。つまりラグビーで怪我をすれば仕事を休まざるをえず給与が減少する、さらに重篤な障害が残る場合は一層深刻な事態となる。そのため教会も布教の手段としてラグビーよりもサッカーを選択しやすかった。(その後教会を基盤とするサッカーチームが多数誕生した。) また企業家も高い金で雇った有名選手が傷害で不出場となれば集客力に影響したからより傷害の少ないサッカーを採用した。

2.2.3 労働運動の進展と労働者のチームスポーツ参加

1880年代に入ると労使間の対立はより激しいものとなった。労働者たちも徐々に余暇を獲得するようになり、1870年代からのレジャー産業、商業化の発展はプロ化の財政的基盤を支える労働者の観衆を生み出し、一方労働者をプロとして組織する興行化、資本家によるチーム作成も徐々に進んだ。この典型がサッカーでのブラックバーンオリムピックの勝利であり、それを契機に正式なプロ解禁へと連なった。そして、優秀なプロになれば高額の給料も保障され、労働者階級の宿命から逃れる手段となった¹⁵⁾。

そしてこの時期のイギリス産業都市の衛生状態と労働者階級の心身の健康状態の劣悪さとそれからの脱却の方策の一つとしてスポーツ参加が徐々に受容され始めた点も大きい。

2.2.4 商業化

世界のフットボール—サッカー、ラグビー・リーグ、ラグビー・ユニオン、アメリカン、オーストラリアン、カナディアン、ゲーリック等—は19世紀の商業化されたレジャー産業の部分として、マスメディアの、そして大衆化時代の精神として発展した¹⁶⁾。

サッカーの観客は主に都市の労働者階級に依存したが、観戦者の増大に伴い、入場料収入は増加した。各チームは土地の購入、スタジアムの改善、新規建設を迫られた。そのためにも、より優れた選手を招聘し、良い試合を遂行し、集客を求めた。

各地域ではパブリックスクール OB や教会、企業家もラグビーやサッカーのクラブを組織した。さらにパブのオーナーたちはビール会社と連携して、フットボール場や更衣室を貸して、観客も含めた試合の前中後のビール消費量アップに結合した。スポーツとアルコールとは密接不可分の関係となった¹⁷⁾。

定期市 (Fair) やサーカスなどの巡回する興

行に比べると、1880年代のスポーツチームはホーム&アウェーを採用しつつ、地域に定着し密着した。こうして市民に溶け込み、市民のプライド、都市間競争の基盤となった。それゆえ、他のチームがうらやむようなホームグラウンドを持つことが決定的に重要だった¹⁸⁾。こうした資本主義化に伴う背景が、サッカーの一層のプロ化を促進した。初期からの労働者階級選手の多さとクラブ経営の必要性からプロ化には大きな抵抗はなかったと考えられる¹⁹⁾。

3. ラグビーの誕生・変遷²⁰⁾

3.1 ラグビーの誕生

1845年にラグビー校でルール化されたことから、ラグビーフットボールと呼ばれた。(プレーヤーは Rugger と呼ばれる。) 当時民俗フットボールはキックが主体になり始めていたが、ラグビー校の生徒たちは (そして OB や教員達も交えて)、この傾向と真向から対立してハッキングを含み、ハンドリングとキャリングを中心としたゲームに固執した。(ドリッピングも多少含まれていた。) これは新興のパブリックスクールとして伝統校への対抗上、独自のものを創り出し、世間の注目を惹こうという望みがあった²¹⁾。パブリックスクールの教育改革の中で、伝統校への参入を狙う新興校ラグビー校では1828~42年まで校長に招聘された T・アーノルド (Thomas Arnold) は貴族趣味の野外活動 (ウサギ狩り、狐狩り等の射撃、釣り、乗馬、近隣住民への狼藉など) を嫌悪し、それらを排除する目的で、そして大英帝国と産業革命の要請する「強健なキリスト教紳士 (Muscular Christianity)」育成の手段として、これまで校内で行われていた野蛮な民俗フットボールの刷新に乗り出した (彼自身はフットボールには関心が薄かったといわれているが)。こうしてラグビールールが1845年に成文化された。またラグビー校 OB の T・ヒューズの『トム・ブラ

ウンの学校生活』²²⁾には、ラグビー校の生活の一環として教育改革以前のフットボールも描かれたが、本書はイギリス国内ばかりでなく、英語圏でも爆発的に普及し、現在も続くベストセラーである。それに伴ってラグビーの普及にも大きく貢献した²³⁾。

自律自製の強調、力とスキル、自発性と統制、個人と集団の微妙なバランスの強調という点で、1840年代のラグビーは、「産業基盤よりもむしろより広い社会的背景の縮図であった。」²⁴⁾更に、ブルジョアジーから見ると貴族主導のサッカーはやや軟弱であった。産業革命と大英帝国を主に担う世界の覇者としてより力強い剛毅さは何としても必須であり、ハッキングを含むラグビーはそのトレーニングにとって最適なものと考えられた。ともあれ、ラグビーにせよサッカーにせよ、産業革命の産業と社会が要請する組織的、合理的な要素を含む面白さ、諸々の技術、戦術そして偶然性をもつ興奮が、これまでのゲームには無かった新たな要素を内包した。このことが特に若者たちを熱狂的に引きつけた理由である。さらに大英帝国下において強いイギリス、強健なキリスト教紳士を求めたから、特にラグビーはそのトレーニングの最適な場として推奨されたのである。

パブリックスクールやオックスブリッジの卒業生たちがそれぞれの地域でラグビークラブを結成し、それへの参加をブルジョアジーのステイタスシンボルとして謳歌した。しかし1863年のサッカー協会の結成には参加しなかった。ハッキングなどが排除されていること（軟弱さ）への抗議が理由であったが、貴族主導に対する対抗心もあった。

しかし全国組織となったサッカーの普及に刺激されて、1871年にラグビーフットボールユニオン（Rugby Football Union: RFU、以降ユニオンと略す）を結成した。この時、ラグビーの命ともいべきハッキングが禁止された。それ

ほどに、ハッキングの暴力性、危険性が高く、怪我の後遺症も深刻で、それを維持すればラグビーの普及は望みがなかったからである。

1880年代のイングランド北部では労働者階級のラグビーへの参加も徐々に増えた。労働者が参加すれば競技に参加するための休業補償（給与補償）問題は必然的に発生し、その是非をめぐって北部の連盟から「休業補償承認」が提起されたが、ユニオン総会はそれはプロ容認の一步であるとして否決した。結局北部地方の多くのクラブが1895年に北部ラグビー・ユニオン（NRFU、以降北部ユニオンと記す。後のリーグ）としてユニオンから独立した。その後、ユニオンではアマチュアリズムを厳守してきたが、多くのクラブではプロ化する選手の嫌疑が常に付きまとっていた。その後多くのスポーツ種目ではプロ組織が誕生し、アマチュアとプロが分離して発展してきたが、そのアマチュア界をイデオロギー的にリードしたのがユニオンである。

ラグビーの国際的普及は各国においてアマチュアリズムを固執するユニオン系とそれに対抗するプロ組織の誕生として発展した。その点ではイングランドのリーグと同類である。オーストラリア、カナダ、アメリカ、ニュージーランドではそれぞれの改変を含みながら独自のラグビーを発展させた²⁵⁾。

3.2 ラグビーはなぜ分裂したのか

ユニオンは頑なにアマチュアリズムを厳守し、プロ化を排除した。プロ化の動向には選手やクラブの除名を含めて厳しい罰則を科した。とはいえ、1885年にはFA（サッカー）がプロを容認した。そしてプロの科学化、高度化はその魅力をますます強化した。さらに産業革命で各産業を基盤に多くの都市が発展したが、地域に根付いたプロ球団は都市のシンボル化をしてライバル意識を刺激し、それに支えられた。イングランド北部の工業地帯におけるフットボールク

ラブではオックスブリッジや北部のパブリックスクールの卒業生も多く参加した一方で、労働者も多く参加した。多くのクラブはこうした階級的「混合」であった。そのために以下に述べる「北部ユニオン」の独立は、ユニオンからの独立だけではなく、クラブ内での対立と独立も抱えたのである²⁶⁾。そしてそれは政治的対立の反映でもあった。つまりアマチュアリズムの厳守派は保守党系であり厳格な階級的現実を維持しようとし、賛成派は自由党系でより平等な社会を希求する勢力であった²⁷⁾。

強健なキリスト教紳士を信奉し、大英帝国を担い、そのナショナリズムを担うブルジョアジーにとって、プロ化はラグビーを放棄するばかりでなく、イギリス国民の生活の根底を破壊すると考えた²⁸⁾。時には、労働者階級出身のプレーヤーがユニオンのイギリス代表に選出されることもあった。特にR・ロックウッド(Richard Evison Lockwood)はイングランドチームのキャプテンも務めた優秀な選手であるが、経済的理由から北部ユニオンの独立と共にそちらに参加した。そのため、ユニオンの歴史記述からは彼の事実は削除された。彼のような労働者階級出身の選手がイングランドの代表になることは、ラグビーが労働者階級に大きく普及したことを示し、イングランドの戦力として彼らが活用されたが、何かと差別されたことを彼自身も述べている²⁹⁾。

こうして労働者階級の参加の多い北部地域のラグビークラブはユニオンに休業補償の承認を求めたが、ユニオンは頑なにそれを拒否した。これに抗議して北部地域のラグビークラブは北部ユニオンを結成して独立したのである。北部ユニオンの分離はブルジョアジーと労働者階級の対立、それを内包した南部と北部の対立でもあった。そして北部のプロ化推進は労働者階級選手の意向でもあったが、ビジネスマン、企業家が興行主として起業家(Entrepreneur)とし

てレジャー産業の新興の一環として意図的にプロ球団を組織したものである³⁰⁾。プロ化は単に選手や興行主が望めばできるものではなく、それを財政的に支える観衆の存在がなければならない。そしてこの時代、労働者階級の労働条件が徐々に改善され、余暇(可処分時間、可処分所得)の所有も漸増した彼らが観衆の多くを構成したのである。イギリス資本主義の発展度を示している。因みに、1890年代にはサッカー選手の給料が上昇し、経営者は手こずっていたが、ラグビー選手側からすればサッカー選手は羨望の的であった。

ユニオンにおけるアマチュアリズム固執、労働者階級への敵対意識は、19世紀末のヴィクトリア朝末期において台頭する労働者階級に対抗するブルジョアジーの社会的趨勢の反映でもあった³¹⁾。さらに、ラグビーでの労働者階級選手によるブルジョア選手への暴力行為は階級制を逆転させるので、ユニオンには受け入れがたく、1895年の分裂の一つの要因にもなった³²⁾。日頃の搾取と抑圧に対するブルジョアジーやその息子たちへの鬱憤晴らしに、ラグビーでのラフプレーは公然と「復讐」できる場であり、試合も修羅場化した。また、陸上競技大会やボートレース大会などへの参加は常に賞金、賞品狙いばかりでなく、こうした階級的対立感情と優越感とがない交ぜになったのである。アマチュアリズムに固執したユニオンは「資本主義社会において資本家がスポーツの市場化、商業化をストップする」という資本主義にとっての根本矛盾を抱えることになった。その後の歴史はそれの固執と矛盾崩壊の歴史である。

こうしてユニオンは殆んど「中産階級ゲーム」であるということは既定の事実化し³³⁾、大英帝国のナショナリズムを体現した。そしてラグビーこそが意思決定、リーダーシップ、冷静さの養成には最高のスポーツであるとの信念となり、こうした思考は今でも存在する³⁴⁾。

4. アマチュアリズムの誕生

4.1 誕生

アマチュアリズムの概念規定をしないまま述べてきたが、ここで簡単に触れたい。既述のように18世紀から貴族を中心に楽しまれていたクリケットにはアマ、プロの用語は使われていた。しかし産業革命時以降のブルジョアジーは中産階級として上の貴族と下の労働者階級に対応しなければならなかった。

最初のアマチュアルールの成文化は1866年にロンドンで行われた第1回全英陸上競技大会での参加資格である。アマチュアリズムが芸術、音楽他の文化では生まれず、なぜスポーツにだけ生まれたのだろうか。それは労働者は芸術、音楽などの文化に参加する余暇（可処分所得、可処分時間）を未だ持ち合わせていなかったからである。しかし彼らの肉体労働はスポーツに必要な筋肉トレーニングを含んでいた。世界的な貿易港を多く抱えたイギリスの港湾労働者たちは荷役の運搬だけでなくボートも漕いだ。炭坑夫、鉄工所の工具らはもっぱら力仕事であった。さらに19世紀後半から普及し始めた郵便や新聞の戸別配達には徒歩やランニングで行われたから、足を生業とする彼らは日常的にトレーニングをしていたことになる。その彼らがブルジョアジーの組織したボート大会や陸上競技会に参加すれば上位を占め、賞金・賞品を得ることを目途に一層の参加を目指すようになった。ましてやプロになればその種目のトレーニングをしたから、優位はさらに明白であった。

「アマチュアは楽しみのためにスポーツをする」ので、練習はほとんどしなかった。そのため諸種の競技会でアマとプロが一緒に競技すれば、プロの優位は一目瞭然であり、ブルジョアジーとしては労働者階級の参加を是が非でも排除しなければならなかった。こうしてスポーツだけに、金は稼がない（稼げない）、技術的に

は少々劣ることを含意しながら、アマチュアリズムが生まれた。（アマチュアという用語はその後「初心者」「未熟者」という意味で他分野でも使われるようになった。）そして必死に労働者階級を排除したのはもっと深刻な事情があった。それは当時の社会背景が決定している。

ヨーロッパでは1789年のフランス革命、19世紀初頭のナポレオン軍の侵攻により各国は封建国家から近代的な国民国家へと転換しつつあり、1848年の大陸諸国での自由運動、社会主義運動の革命などを経験して民族の独立運動など「諸民族の春」を経験しつつ、資本主義の大きなうねりの中にあった。この時代をE・ホブズボームは「革命の時代」³⁵⁾と呼んだ。この時期はイギリスを始め大陸も含めて労働者の組織化が進み「労働者階級」の概念が、1820年代には「社会主義」という概念も形成された³⁶⁾。1825年にはイギリスで世界で初めて労働組合が合法化され、1842年辺りまでは労働運動発展史の「革命的な時期」（ウェップ）と呼ばれている³⁷⁾。1830年代から1848年まで、労働者の選挙権実現の綱領「人民憲章」を掲げて闘ったチャーティスト運動を経験した。さらに1844年の工場法、1847年の10時間法による主に児童労働時間の制限、1850年の労働法での土曜半日制採用など労働者階級の動向は活発化していた。1848年にはマルクスとエンゲルスによる『共産党宣言』が出版され、社会主義運動は綱領を得て組織化され始めた。また1850年前後は全国各地の工業地帯で、資本家たちの厳しい搾取に抗して労働者たちのストライキも多発していた。1864年にはロンドンで第1インターナショナル（国際労働者協会）が結成され、労働運動は国際連帯を意図し始め、1867年の選挙法改正は労働者の参政権を実現させた。さらに普仏戦争で敗北し第2帝政の崩壊したフランスに、1871年3月から5月までの2ヶ月間とはいえ社会主義革命政権を実現させたパリ・コミューンは、ヨーロッパの

そしてイギリスのブルジョア階級を震撼させた。

とはいえ、1848年から1875年は「資本の時代」(E・ホブズボーム)と言われるように、イギリスを始め西ヨーロッパ諸国の経済は大きく発展し、次の植民地も拡大する「帝国の時代」(E・ホブズボーム)を担うブルジョア階級が経済ばかりでなく政治、軍隊、文化などあらゆる分野に主役として躍り出て実権を獲得した時期である。彼らは新興階級として伝統とする文化を所有していなかった。そこで貴族を牽制しつつも、彼らから多くを模倣した。そしてそれらの多くはあたかも貴族の伝統と連結するように伝統化、儀式化された³⁸⁾。

当時の産業都市は、労働者階級のスラムを抱え、それらは都市の東部地区(East)を占めた。それは産業革命期の工場からの煤煙がイギリス特有の西風に乗って東部を汚染したからであった。エンゲルスのマンチェスターにおける実態調査『イギリスにおける労働者階級の状態』(1845)はその他の都市でも大差ないことを示した。伝染病の温床、モラルの崩壊、治安の悪化を招いた。産業革命以前からの海外貿易によって持ち込まれた南方の地方病(チフス、コレラ、回帰熱など)が伝染病としてスラムから蔓延した。伝染病は西部地区に住むブルジョア階級にも蔓延した。労働者階級は「不潔、道徳的退廃の集団」であり、人口的に圧倒的多数を占める彼らの動向はイギリスのブルジョア階級にとって脅威と警戒、忌避の対象であった。日常的に工場での管理、搾取の相手であり、階級的に劣ると蔑視する彼らに、たとえスポーツ競技会といえども敗北することは許されなかった。それゆえ、アマチュアルールをもって何としても排除したのである。

1860年代はブルジョア階級にとってのレジャーブームとなり、既に普及していた鉄道を利用した旅行がそれを促進し、大都市は多くの宿泊施設を建設した。典型は1851年の第1回万

国博覧会(ロンドン)であり、多数の観客を集めた。ブルジョア主催のスポーツ競技会も多数開催されるようになった。これはブルジョア階級の統合の場でもあった。この頃から20世紀の初頭まで、ブルジョア階級の多くが爵位を「購入」し、自らの社会的地位を高めようとした。伝統文化を持たなかった彼らはこの時期多くの「伝統の創造」(E・ホブズボーム)を試みた。サッカーやラグビーの創出もその一環であり、新興階級としてのブルジョア階級共通の生活習慣、文化享受への参加も重要であった。新たな文化であるチームスポーツへの参加は彼らの階級意識の形成にとって重要な要素であった³⁹⁾。

さらに19世紀中葉からのパブリックスクールの増加、さらにオックスブリッジへの進学に伴いスポーツも普及した。そして各学校間の対抗試合は同窓会組織(Alumni)の交流の場としても重要性を増し、子女の結婚相手の出会いの場、商業上の出会いの場としての社会的、経済的、政治的な場としても重要性を増大させた。これはアメリカにも波及し、特に東部海岸の名門大学間(Ivy League)の対抗試合は社交の場、出会いの場として、試合と同等の意義、ブルジョア階級の統合の場となった⁴⁰⁾。しかしそこに労働者階級が参加することは「平和な」集まりに招かれざる客が闖入し、競技会を台無しにしてしまうことであった。とはいえ、1860年代までは労働者階級には陸上競技などの個人種目は普及していたが、サッカーやラグビーなどのチームスポーツは普及していなかった。

4.2 アマチュアリズムの本質

アマチュアリズムとは端的に言えば、スポーツのブルジョア階級による独占、労働者階級排除のルールとそれを取り巻くイデオロギーである。ところで、1866年のアマチュア規定は大きく3つの要素を含んだ。第1はアマチュアとは貴族、政府や軍隊の高官、弁護士、資本家、

オックスブリッジの学生・卒業生、パブリックスクールの卒業生などの中・上流階級であり、労働者や職工あるいはスポーツやその指導を生業とする者（コーチや体育教師）はアマチュアではないと、階級や職業を明記して排除した「階級的規定」である。第2は競技会で賞金・賞品を得てはいけない、競技会に参加するために休んだ仕事の休業補償を得てはいけない、そしてスポーツ参加において他者からの援助を得てはいけない（自前で行え）などの「経済的規定」である。そして第3は「アマチュアはジェントルマンである」「フェアプレーを尊重する」等の曖昧な「倫理的規定」である。しかし19世紀末の労働運動の高揚の中で「階級的規定」は刺激が強すぎるからと削除されたが、「経済的規定」によって労働者階級排除は実質的に効果を持った⁴¹⁾。

こうしてアマチュアリズムは人口の大半を占める労働者階級をスポーツから排除することによって、資本主義社会において資本家自らがスポーツの大衆化、市場化を阻止した。これは資本主義社会における根本的な矛盾であり、その後の「アマチュアリズムに包まれたスポーツ」はその崩壊の歴史でもある。イギリスにおけるスポーツの普及はアマチュアリズムの誕生と結合しており、イギリススポーツの歴史は特に資本主義の階級的性格を特長とする⁴²⁾。さて、そのアマチュアリズムは次のような影響をもった。個人の責任で、個人の負担で参加する、他者の援助を受けてはいけないという経済的規定はA・スミスやJ・ベンサム以来続く「ブルジョア個人主義」によって支えられた。これは「ブルジョアスポーツ自治」に直結した。つまりスポーツでの出来事はスポーツ内で処理するというものである。たとえスポーツ内の紛争や怪我でも法律の介入を許さず、スポーツで処理するという自治、ないし「囲いこみ」である。これによってスポーツ内で怪我をしてもそれは運が

悪かったのであり、個人の責任で対処することが求められた。スポーツ傷害がある程度意図的の加害だと思われても、それはスポーツ内で調停され、その加害者を裁判に訴えることを思想的にも現実的にも制約した。そうした傷害、後遺症を自力で賄う経済力をブルジョア階級は有したのである。それは労働災害で利用された「危険の引き受け」のスポーツ内での実質的な思想基盤を構成してきた⁴³⁾。

5. 大英帝国と植民地

5.1 大英帝国

1875年辺りから第1次世界大戦開始の1914年にかけてはE・ホブズボームの指摘のように、世界は「帝国の時代」である。西欧の列強による世界の植民地の争奪戦は自国のナショナリズムの高揚を伴った。大英帝国のビクトリア後期に「強健なキリスト教紳士」と社会ダーウィニズムとの不安定な融合が作り出され、次の3つの価値観に結晶した。①帝国ダーウィニズム—白人が劣等な有色人種を支配し、文明化し、清めるために神の許した権利、②制度的ダーウィニズム—帝国の義務の遂行のために学校での身体的、精神的強さの育成、準備、③紳士の教育—海外での軍事的克服と国内での政治的支配のためのリーダーシップの育成⁴⁴⁾。プリティッシュネス、イングリッシュネスはアングロサクソン民族の優位性という人種的偏見を形成した。特に三角貿易⁴⁵⁾に見るようにアフリカ系黒人への差別を頂点にアジア、南米の諸民族をも支配して劣等視した。植民地の管理、海軍の運営他、各地で心身共に強健でリーダーシップのある男性を求めたが、それらの育成はパブリックスクールでのラグビーやブリーフェクト・ファッキング（寮での自治）に依存したから、アマチュアリズムは男らしさ（Manliness）を強調した。またパブリックスクールでの過度なスポーツ強調の合理化のために「アスレティシ

ズム (Athleticism)」という人格形成論が構築され学校に普及した⁴⁶⁾。これは翻って女らしさの蔑視となり、女性に対しては家父長制、男尊女卑の下に、女性に弱い保護されるべき性、男性に服従する性としての差別観と資本主義的女性蔑視(搾取対象)とが結合された。それゆえ、永い間女性の社会参加、スポーツ参加も禁止されてきた。女性のスポーツ参加は19世紀末、ブルジョアジーの家庭の少子化や女性の社会参加、権利向上運動などの一環として、ブルジョア家庭の女性の教育の向上と共に普及した⁴⁷⁾。

5.2 大英帝国と植民地

大英帝国は19世紀末には世界の1/4を植民地として所有した⁴⁸⁾。重要な所にはイギリス本国から統治のための軍隊や優秀な統率者を派遣した。彼らはオックスブリッジや有名なパブリックスクールの卒業生であり、ラグビーを学んでいたから、植民地では好んでラグビーを(夏にはクリケットも)楽しみ、その屈強さを誇示した。オーストラリア、ニュージーランド、南アなどの資源の豊富な植民地にはイギリスからの植民者も多く派遣された。彼らは母国 (the Mother Country) との貿易、軍事支援を頼りとする上からブルジョア文化を採用し、精神的支柱として母国との関係も重視した。植民地政策は現地人を抑圧し、上層部を巻き込み、その子どもたちの一部をイギリスのパブリックスクールやオックスブリッジに送り、イギリスに順応させた。こうした中で、植民地支配の手段としてスポーツは重要な役割を果たした⁴⁹⁾。それらの植民地ないし属国は母国との絆を命綱としていたから、テストマッチ(国際試合)で母国の気を引き付けることが重要だった。そのためにはラグビーとナショナリズムで国内を統合し、母国に勝って母国の関心を自分たちに向かせることだった。こうしてオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカのラグビーは母

国を凌駕するほどになった。ともあれ、大英帝国の絆を強める上で、ラグビーは重要な手段であった⁵⁰⁾。

これはラグビーほどでないが、クリケット他の種目でも同様であった。1924年オリンピック・パリ大会、1928年アムステルダム大会の直後に、ロンドンで競技大会を開いた。そして第1回大英帝国国際競技大会(後のコモンウェルス大会)が、世界恐慌(1929~1933)の不況下であったがカナダの援助を得てハミルトン(カナダ)で1930年に開催された。第1次世界大戦以降、アメリカの影響力が増大し、大英帝国の覇権力に陰りが出始めていた中でその「再建」を期待して帝国傘下の国々の参加を得て構想されたものだった⁵¹⁾。またオリンピックが純粋にアマチュアリズムを維持していないとの認識が広く感知されはじめており、それが本大会の発足のきっかけともなった⁵²⁾。

ところで、イギリスの植民地はアジア、カリブ諸国にも存在したが、これらの国々にはサッカーが普及した。これは植民地の等級による本国からの派遣人材の等級に関連した。つまり上級の植民地にはオックスブリッジやパブリックスクールなどの卒業生が多く派遣された。それ故に彼らは大学や学校で習得したラグビーやクリケットを享受した。一方、中級以下の植民地には上記の大学・学校以外の卒業生たちが派遣された。彼らは学生時代には主にサッカーを習得したので、植民地にサッカーを持ち込んだのである。さらに、サッカーはルールと用具の簡易さ、傷害の少なさゆえに、貧しい現地の住民にも容易に普及した。ラグビーやクリケットは中産階級的であり、現地住民がたとえ能力に優れていてもその低階級ゆえに受け入れてもらえなかったが、サッカーはラグビーとは異なり能力主義的であり、その出自に拘わらず採用されたことが、南米他でも広く受け入れられたのである⁵³⁾。そうしたサッカーは第1次世界大戦前

は近代化の手段であった。スピード、自由、博愛主義、平等などを内包したし、能力主義がアマチュアリズムを砕いた⁵⁴⁾。

6. ラグビーとナショナリズム

ユニオンがブルジョアジーの象徴であり、彼らが大英帝国の推進の中心であった。それゆえ大英帝国のナショナリズムは彼らのイデオロギーでもあった。そしてアマチュアリズムはナショナリズムと融合し、混然一体となった。パブリックスクールやグラマースクールでは、大英帝国の国内外を問わず、未来のリーダーの養成は明らかに男性性つまり反女性性に根拠を置いていた。こうしてアマチュアリズムは概念的に男性的、軍事的、愛国主義であった⁵⁵⁾。第1次世界大戦は最初の帝国主義国家間の対立であったが、当時の帝国主義諸国は複雑な離合集散を繰り返しており、傘下諸国を巻き込んだため、ヨーロッパ大陸全体を戦場化した。当初は早急に収束すると思われていたが1914~1918年の5年に及ぶ長期戦となり、各国は総力戦を強いられた。イギリスもまた南アにおけるボーア戦争（1899-1900）以来の戦争であり、しかも隣国の同盟国フランスも戦場化した危機感から、国力を総動員しての戦時体制を組んだ。そのため国民の士気高揚も重要だった。イギリスは30歳以下の男性の50万人、しかもオックスブリッジの学生や上流階級の若者の多くがこの戦争に積極的に志願した⁵⁶⁾。彼らの多くはラグビー選手でもあり、イギリスの勝利に貢献した。戦地でラグビーボールのキックと「突撃！」の掛け声とともに敵地へ突入したとの武勇伝も生まれ、勝利の立役者としてラグビーの人気は高まった。

ブルジョアジーはますますイギリスのナショナリズム、大英帝国を担う中心としての自負を強め、ラグビーもまた一層の名声を得た。こうしてラグビーはブルジョアジーのゲームであり

世界であるとのプライドは一層強められた。だからこそ、彼らは中産階級の象徴としてラグビー、アマチュアリズムに固執したのである。

ブルジョアジーは、アマチュアリズムに厳格にこだわって労働者階級から自分たちを隔てるのが容易だと考えていた。また、労働者階級の排除によってブルジョアジーとしての階級的統合を意図した。その中でもナショナリズムが一番重要だった。意欲的なブルジョアジーは、自分たちを模範的な愛国者の階級として集合的に認識した⁵⁷⁾。

7. ラグビーとラフプレー

7.1 ラフプレー＝ブルジョアのプライド

アマチュアルールはその倫理的規定で「フェアプレー」を強調した。「プロ（労働者階級）は金のために、勝利だけのためにダーティな試合をするので本当のスポーツではないが、アマチュア（ブルジョアジー、貴族）はレクリエーションのためにフェアにプレーをするから本当のスポーツである。」これがブルジョアジーの作り出した見解であり、プロ批判である。さらにラグビーは激しい身体接触を含むゲームであることからフェアプレーは大前提となる。公正でフェアなジェントルマンとしての道徳を学ぶ場としてラグビーが最高の場であることを、ユニオンは自負した。ラグビーはまさに「紳士のスポーツ」としての冠を付与された。

しかしその一方で、強健なキリスト教紳士としてのリーダーシップの養成はラフプレーを許容した。そして勇敢に立ち向かうイギリスユニオンチームは the Barbarians（野蛮人）との愛称も受けている。競技中や練習中に発生する脳震盪や骨折、あるいは頸椎損傷による四肢麻痺などの重篤な傷害は他の競技に比べて深刻なほどに多い。（これは現在にも通じる）特にタックル、スクラム、モールはトップスピード、全力でぶつかり合うことから怪我の発生は特に多

い。しかしこれらの技術がラグビーの本質、ラグビーの神髄と考えられているから問題は深刻である⁵⁸⁾。ラグビーはその誕生の時からハッキング（脛蹴り）、トリッキング（足掛け）やパンチングなどのラフプレーを強く含むゲームであり、サッカーと異なる点であった。ラフプレーは労働者階級の欠点であるというブルジョアジーからの非難は経験的に見て事実とは異なった。むしろブルジョアジーのスポーツ管理者たちの「男性性」の哲学に統合された一部であり、剛毅な性格形成として黙認された。1871年のユニオンの設立ではラフプレーの頂点ともいべきハッキングは禁止されたが、1876年に試合中の2人の死亡後、中止要求が出されたが、『アスレティックニュース』誌は、「イングランドの若者が民族のエネルギーと伝統的な勇気を引き継いでいる限り、フットボールは決して禁止されるべきでない」と、ナショナリズムとハッキングを含むラグビーを擁護した⁵⁹⁾。

現実にはラグビーはどれくらい暴力的だったのだろうか。その起源ともいべきラグビー校でのラグビー誕生（1845年）前の乱暴さは、『トム・ブラウンの学校生活』にも示されている。ハッキングの応酬が予想される中で、靴の先端には金具を取付け、敢えて白いズボンをはき、脛あても付けずに試合に臨むことが勇気の印であった。試合後の脛は血で染まり、打撲、骨折は当たり前で、それでも臆せずに参加することが勇敢の証明であった。

選手の上の受傷の正確な記録はないが、「ヨークシャーラグビーの死者1886-1895」に依れば以下のようなものである。死者は13人でその死因は以下のようなものである。腎臓傷害、骨盤膿瘍、脊髄損傷、重度脳震盪、腹部傷害、肝臓破裂、敗血症、内臓傷害、不明3名、頸部骨折、脊髄傷害⁶⁰⁾。いずれも激しい接触の結果である。

暴力を含むラフプレーとそれに耐えることは、大英帝国の求める強健さの育成であり、むしろ

大目に見られた。しかし暴力的な試合は報復を生み、大荒れな試合が多かった。それを擁護するように「ラグビー試合での暴力は本当の暴力ではない」とか「タックルなどの痛いプレーに比べればパンチなどは暴力とは考えない」といわれ、ブルジョア青年の「蛮カラ」さとして許容され、試合が終われば「ノーサイド」として敵味方無く全て水に流し、試合後の宴会で酒を酌み交わし、羽目を外した交流ですべて終わるのである。

また試合に参加することはアマチュアリズムの前提として自前で自己責任で参加し、試合中の事故は運が悪かったのであり、その処理もまた自己責任であった。スポーツ傷害保険に加入してそこから補償金を得ることはユニオンではプロ行為と考えられたから存在しなかった。ましてやスポーツ傷害に関するスポーツ裁判など存在しなかった。もし提訴すればその人はブルジョア世界から放逐されたであろうし、また当時の裁判所もそうしたアマチュアスポーツ界の意向を反映して、受理しなかったであろう⁶¹⁾。

フィールドでのラフプレーは当然観客にも反映し、ラグビーやサッカーにおける観客の暴力問題は同様に深刻だった。特に試合前の飲酒で出来上がった観客がフィールドでの暴力・ラフプレーと呼応して荒れるのである。そして試合中の飲酒はそれに油を注ぎ、試合後の飲酒が試合での鬱憤も含めて晴らす大きな機会となった。それらのフットボールは既に、労働者階級と中産階級間の階級的対立、イングランドのプロテスタントと産業革命時に労働力として移住したアイルランド人（カソリック）との宗教対立、民族対立、さらにそれらを含んでの地域的対抗意識と日常の鬱憤が試合で発散されたからである。特にライバルチームのサポーター同士の対立は、時には死者を出すほどに、頻度高くエキサイトした。イギリスでは中産階級のラグビーに対して労働者階級のサッカーと言われるよう

に、観客もまたそれぞれの階級が多い。これは現在でも同様である。特にサッカーのダービーマッチ（同一市内のチーム対戦）の場合、そうした諸対立を内包し、観客の暴力は試合の前、中、後と、常に一触即発状態であった。典型例が、グラスゴー（スコットランド）のレンジャーズとセルティックの「古い工場」(Old Firm：19世紀末からの対立で、しかも試合は常に満員となることから、この名称がついたといわれる) と呼ばれるダービーマッチである。両チームの存在する場所とサポーターが、前者はイングランド系、プロテスタント、中産階級が主であるのに対し、後者はアイルランド系移民、カソリック、労働者階級である。こうした民族、宗教、階級の対立が根強く存在し、これらの対立がダービーマッチで爆発する。更にそれを加速させるのが試合前・中・後のアルコールである。その他多くのダービーマッチは類似的の性格を持っている。

ラグビーでの暴力的な行為は1970年代、1980年代に再び復活したといわれる。これはイギリス社会の不安定化の反映である。当時、サッカーフーリガンが大災害を起こし、あるいは度重なるサポーター同士の場内外での暴力行為を勃発させ、100人規模の死者と多数の傷害者を幾度となく出したが、こうした社会的背景と多少の関係があるであろう。

7.2 ラグビーはなぜ、ラフプレーを克服できないのか

ラグビーはサッカーと同様に民俗フットボールの暴力性を克服したが、それでもなおラフプレー（ハッキング、トリッキング、パンチング、スクラム、モール、タックルなど）を競技のエッセンスとして含み、さらにブルジョアスポーツ自治、「囲いこみ」は外部からの声を遮断した。ラフプレーはその後アメリカンフットボール、アイスホッケーなどにも引き継がれた。

大英帝国のナショナリズムを中心的に担ったブルジョアジーは世界の指導者として、強健で剛毅なリーダーシップを必要とした。それは植民地統治においても、世界最強の海軍としても、世界の貿易商人としても…。その象徴としてのラグビーは「創られた伝統」化をしてもはや不可侵化をし、ブルジョアジーのプライドはその修正を許さなかった。

8. スポーツ・フォー・オールの影響

第2次世界大戦中の1942年に発表された「ベヴァリッジ報告」に基づいて、戦後のイギリスは「揺り籠から墓場まで」と表現される福祉国家を志向した。戦後の疲弊した中でも、職業、住居、教育、医療など生活、命に密着する領域は国家が進んで支援する国家体制となった。1950年代後半になると世界的な高度経済成長期に入り、西欧、北欧、ニュージーランドも含めた福祉国家はその福祉の対象を文化、芸術、スポーツなどの領域にも拡大した。この時期、労働や生活の機械化、省力化が進み、国民の食糧事情も大きく改善されたが、これは国民の運動不足を招き、糖尿病などの生活習慣病の原因となり始めた。そして医学、医療の発達はこれまで対処できなかった病気を早期発見し、精密治療することができるようになったが、これは国家の医療費の増大となり、国策としても国民の健康・医療対策は喫緊の課題となった。

こうして国家が率先して国民のスポーツ参加を奨励するようになった。国民の余暇を保障する労働条件の改善や、スポーツ参加の前提であるスポーツ施設の建設、指導者の養成、スポーツクラブの育成を国や自治体が積極的に支援するようになった。またそうしなければスポーツの国民への普及は不可能であった。（ここにスポーツの公共性の根拠がある。）この時期はまた国民の諸権利の高揚期でもあり、国民の生存権、労働権、教育権ばかりでなく、国民の文化

権、スポーツ権も承認されるようになった。こうして国民のスポーツに参加する権利とそれを保障する国家の義務が結合されて、「スポーツ・フォー・オール政策」が誕生した。人類史の到達点である。つまり、アマチュアリズムのようにブルジョアジーの独占によって労働者階級、女性を排除するのではなく、彼らを率先して参加させるという思想と施策であるが、アマチュアリズムの発祥国であったイギリスでは他の西欧諸国と比べて国家のスポーツ政策は10年以上遅れた。1960年代で当時の西ドイツでは既に国民の必要とするスポーツ施設は今後の15年間で100%充足するという「ゴールデン・プラン」や国民のスポーツ参加のための地域スポーツクラブ建設（第2の道）などへの国家援助、スポーツ・フォー・オール政策を推進し始めた。イギリスでは1960年にウォルフエンデンレポート『スポーツと地域社会』を得て、青年層の非行対策として、またイギリススポーツの国際的競技水準の低下がナショナリズムの低下となっており、他の西欧諸国に追いつくために国民スポーツ振興を提案した。この時点でアマチュアリズムは実質的に批判された。そして1970年代からのスポーツ行政執行機関スポーツカウンシルの主導の下に、スポーツ・フォー・オール政策が推進され、西欧諸国に急追した⁶²⁾。

これによってラグビーへの国民全般、労働者階級の参加をも促進することになった。しかし、これまでブルジョアジーの文化として自負し厳格にアマチュアリズムに固執してきたユニオンにとって、それは歓迎されることではなかった。一方、福祉国家を推進する政府はそうした階級的、差別的な組織を放置しておくことはできず、1970年代中頃までにユニオンはスポーツカウンシルからその姿勢（アマチュアリズムの固執）を改めるよう指導を受けていた。しかし未だにアマチュアリズムに固執していたユニオンに対して、スポーツカウンシルはついに1986年に

「スポーツ・フォー・オール政策を支持しない組織には補助を行わない」と警告した⁶³⁾。ユニオンもこれまでのエリート主義を徐々に改善することが求められた。とはいえ、アマチュアリズムは社会に沈殿し、普及しつつあった国民へのスポーツにも影響し、選手間のスポーツ裁判が最初に提起されたのは1985年であった。

イングランド（人口5,300万人：2020年）には現在ラグビークラブは2,000余あり、週1回プレーする人は170,200人、レフリー6,000人、競技者数は10歳以前362,319人、10代の男性698,803人、成人男性121,480人、成人女性11,000人で総数1,193,602人を数え、サッカーには及ばないが、第2位の人口規模を誇る競技である。とはいえ、参加者が多ければそれだけ怪我也増加する。特に若年層でのタックルやスクラムを禁止する声も近年多くなっている。

RFUでは先ず2002年から「プロ・ラグビー傷害調査プロジェクト」を発足させて毎年調査を公表し、いろいろと対策を採ってきた。その経験を生かして2009年からは「地域ラグビー傷害調査と予防計画」を発足させ大学と連携して傷害実態の把握と対策に乗り出している。近年ではより詳細に、女性ラグビー、青年ラグビーと、対象をより焦点化している⁶⁴⁾。

本研究は科学研究費補助金「スポーツ事故における傷害補償制度の国際比較研究」（研究代表者：同志社大学・川井圭司教授。「18H03161 基盤研究（B）補助金」。2018年度から4年計画）の成果の一部である。

注

- 1) 内海和雄「資本主義はなぜ、集団スポーツを産んだのか（1/2）」『広島経済大学 研究論集』第42巻第2号、2019年11月、pp. 1-16。内海和雄「資本主義はなぜ、集団スポーツを産んだのか（2/2）」『広島経済大学 研究論集』第42巻第3号、2020年3月、pp. 1-17
- 2) Mathew Taylor, *The Association Game — A History of British Football*, Routledge, 2008, 2013, p. 8

- 3) 内海和雄「資本主義はなぜ、女性のスポーツを普及させるのか」『広島経済大学 研究論集』第40巻第2号, 2017年9月, pp. 1~22
- 4) E・J・ホブズボーム『産業と帝国』未来社, 1984年, p. 13
- 5) A・ヴォール (唐木・上野訳)『近代スポーツの社会史—ブルジョア・スポーツの社会的・歴史的基礎』ベースボール・マガジン社, 1980年, p. 66
- 6) A・ヴォール, 同前, p. 128。しかしヴォールはチームスポーツの誕生の背景については分析していない。
- 7) Richard Holt, *Sport and the British: a modern history*, Clarendon Press, 1989, p. 86
- 8) 玉木俊明『ヨーロッパ繁栄の19世紀史—消費社会・植民地・グローバリゼーション—』ちくま新書, 2018年, p. 52。その建設には多くのアイルランド人の移入で賭け、イギリス国内でのアイルランド人問題は、都市、民族、宗教、労働、文化での問題点となった。
- 9) A・ヴォール (5), の p. 56
- 10) E・J・ホブズボーム他編 (前川他訳)『創られた伝統』紀伊國屋書店, 1992年
- 11) Richard Holt, *ibid.*, p. 74
- 12) E・ダニング／K・シャド共著 (大西／大沼訳)『ラグビーとイギリス人：ラグビーフットボール発達の社会学的研究』ベースボール・マガジン社, 1983年, pp. 118-9
- 13) 内海和雄『オリンピックと平和』不味堂出版, 2012年, p. 87, 1612年からイングランドのコッツウォルト地方で行われたドーヴァー・オリンピックでも「脛蹴り shin-kicking」が行われており、当時は一般化していたと思われる。金属を先端に着けた長靴を履いて、競技者が互いに肩に手をかけて離れずに、相手を蹴りあう競技でありコッツウォルト地域のゲームとして有名である。現在は脛当てをして行われている。コッツウォルトに近いラグビー近辺でもこうした競技は普及していたと思われる。
- 14) Richard Holt, *ibid.*, p. 107
- 15) E・J・ホブズボーム, T・レンジャー編 (10), の p. 439
- 16) Tony Collins, *How Football Began: A global history of how the world's football codes were born*, Routledge, 2019 (Electronic book), p. preface
- 17) Tony Collins and Wray Vamplew, *Mud, Sweat and Beers: A Cultural History of Sport and Alcohol*, Berg, 2002 (全編がラグビー, サッカーの発展とパブ経営やビールの消費量との関係が示されている。)
- 18) Tony Collins, *Sport in Capitalist Society —a Short History*, Routledge, 2013, p. 50
- 19) Mathew Taylor, *ibid.*, Chapter 1, 2
- 20) E・ダニング他 (12), の p. ix。「ラグビーの技術、戦法、歴史などの翻訳書は相当出されているが、ラグビーの発達を社会学的に研究されたものは、E. ダニングらの『ラグビーとイギリス人：ラグビーフットボール発達の社会学的研究』が最初のもののように思われる。」この翻訳者の指摘は妥当であろう。その後ラグビーの歴史的、社会学的研究はトニー・コリンズの重厚な研究によってダニングらが依拠している「文明化の過程」理論とその実証不足が克服されるが、ともあれ、1つの端緒を形成した。
- 21) E・ダニング他 (12), の p. 101。当時のラグビーとサッカーは多くの共通した要素を伴っていた。両者の違いがより明確化したのは1870年代に、それぞれの連盟、各地でリーグ戦が生まれ、試合数が多くなる中で、それぞれに洗練されていった。因みにこうした競技会の増加は産業革命で発展した諸都市、町、教区、工場他における対抗意識の高揚に支えられ、またそれらを促進した。とはいえ、当時伝統校であるイートン校側ではライバルは同じ伝統校であってラグビー校などの新興校をライバルとは見做していなかったと、トニー・コリンズはダニングをかわしているが、新興校から見れば伝統校は大いなる対抗対象であることには変わりなかったと思われる。
- 22) Thomas Hughes. *Tom Brown's School Days*, 1857. 翻訳では岩波文庫 (1948, 1989) あり
- 23) この本はパブリックスクールにおける道徳形成のために生徒達への読本として出版された。当時、パブリックスクール内での同性愛やマスターベーション (自慰) に関する道徳的なパニック状態にあったことも背景にある。それは単に生徒達の道徳形成の手段に留まらず、大英帝国の要請する強健なキリスト教紳士の育成に最適な方法として、パブリックスクールの教育改革の手本とされた。(Tony Collins, *Sport in Capitalist Society —a Short History*, Routledge, 2013, p. 42)
- 24) E・ダニング他 (12), の p. 117。ただここでダニング他は「産業基盤よりはむしろより広い社会背景」と表現し、両者が対立するニュアンスを示し、産業基盤をラグビー誕生の背景から除外しているがこれは誤りである。より広い社会背景とは産業と社会のより高度化された「分業と協業」であり、さらに大英帝国という国家的、国際的政治、経済状況の全体を含むものである。まさに産業基盤と社会背景が結合してラグビーやサッカーを産んだのである。彼らのラグビー誕生の背景把握における方法論上の弱点を示している。
- 25) トニー・コリンズ『ラグビーの世界史—楯円球をめぐる200年—』白水社, 2019年は世界各国の独自のラグビーの発展を示している。
- 26) Tony Collins, *1895 and All That... Inside Rugby League's Hidden History*, Scratching Shed Publishing Ltd., 2009, pp. 33-34
- 27) Tony Collins, *ibid.*, p. 37
- 28) Tony Collins, *ibid.*, p. 64
- 29) Tony Collins, *ibid.*, Chapter 2. The Greatest Player You've Never Heard Of, pp. 13-25
- 30) Tony Collins, *ibid.*, Chapter 3. Myth & Reality in the 1985 Split, pp. 27-39. ホブズボームが「帝国の時代」と呼ぶ1875-1914年は、現代の都市文化と呼ばれる観戦スポーツ、新聞、映画などの国際

- 的な普及を見た時代である。(E. Hobsbawm, *The Age of Empire 1875-1914*, Vintage Books, 1989, p. 337)
- 31) Tony Collins, *Ibid*, Chapter 3. Myth & Reality in the 1985 Split, p. 38
- 32) Tony Collins (18), の p. 78
- 33) Tony Collins (18), の p. 98
- 34) Tony Collins, *A Social History of English Rugby Union*, Routledge, 2009, p. 212
- 35) E. J. Hobsbawm, *The Age of Revolution: Europe 1789-1848*, Weidenfeld and Nicolson, 1962. (翻訳 水田 洋他訳『市民革命と産業革命』岩波書店, 1968)
- 36) E. J. Hobsbawm, *ibid.*, pp. 209-210
- 37) 浜林正夫『イギリス労働運動史』学習の友社, 2009年, pp. 72-73
- 38) E・ホブズボーム他, 『創られた伝統』紀伊国屋書店, 1992年。特に第7章「伝統の大量生産—ヨーロッパ, 1870-1914」
- 39) E. Hobsbawm, *The Age of Empire 1875-1914*, Vintage Books, 1989, p. 174
- 40) E. Hobsbawm, *ibid.*, p. 179. ホブズボームはまた, 19世紀末から20世紀に初頭にかけてのブルジョアジーのスポーツの興隆を挙げ, それがブルジョアジーの統合の場であったことを示している。(pp. 182-3) そしてそれはまた, ブルジョアジーとしての確立の一環としての「伝統の創造」の最も激しい時期であった。(E・ホブズボーム他編『創られた伝統』紀伊国屋書店, 1992年, 特に「7 伝統の大量生産—ヨーロッパ, 1870-1914」pp. 407-470)
- 41) 内海和雄『アマチュアリズム論』創文企画, 2007年
- 42) Matthew Taylor (2), の p. 8
- 43) 内海和雄「スポーツ事故における傷害補償制度の国際比較研究 (4/4)—アマチュアリズムと「危険の引き受け」—」『広島経済大学 研究論集』第44巻第2号, 2021年11月
- 44) J. A. Mangan, *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School: The emergence and consolidation of an educational ideology*, Cambridge University Press, 1981, p. 136
- 45) 三角貿易とはイギリスから工業製品, 軍需物資をアフリカ西部に輸出し, そこから黒人奴隷を買い込みカリブ海諸島やアメリカ南部におけるイギリス人入植者の農園に売却し, そこからコーヒー, 砂糖, 綿他の農業生産物を買ってイギリス(他ヨーロッパ大陸諸国)へ輸入した。これによってイギリスは莫大な利益を上げた。
- 46) 同様な事例として1900年前後のアメリカ YMCA では布教活動の一環としてバスケットボール (1891) やバレーボール (1895) の意図的な創造を見た。
- 47) 内海和雄「女性スポーツの誕生」『広島経済大学 研究論集』第40巻第4号, 2018年3月, pp. 1-21
- 48) E. Hobsbawm, *The Age of Empire, 1875-1914*, Vintage books, 1989, p. 74
- 49) A・グットマン (谷川他訳)『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』昭和堂, 1997年
- 50) Tony Collins (34), の p. 166
- 51) 内海和雄『オリンピックと平和—課題と方法—』不味堂出版, 2012年, pp. 189-191
- 52) Tony Collins (15), の p. 172
- 53) Tony Collins, *ibid.*, p. 169
- 54) Tony Collins, *ibid.*, p. 171
- 55) Tony Collins (17), の p. 41。イギリスにおける女性のラグビー参加は他の種目に比べて大きく遅れ, 1960年代における大学生のチームの誕生以降である。
- 56) E. Hobsbawm, *The Age of Extremes: The Short Twentieth Century 1914-1991*, ABUCUS, 1994, p. 26
- 57) E・ホブズボーム他 (10), の pp. 454-455
- 58) 因みに, 1990年にバミューダで第1回ラグビー医学国際会議が開催され, その議事録が Terence Gibson (ed.), *Rugby Medicine*, Blackwell Special Projects, 1991として出版された。1992年には D. W. Payne (ed.), *Medico-Legal Hazard's of Rugby Union*, Blackwell Special Projects, 1992がイギリスで出版された。こうしてラグビー固有の医学が求められた。この背後には世界のラグビー界での傷害が深刻化する一方で, その予防策, 救済策, さらにそれらの法的処理がより強く求められたからである。
- 59) Tony Collins, *Rugby's Great Split —Class, Culture and the Origins of Rugby League Football—*, Frank Cass, 1998, p. 124
- 60) Tony Collins, *ibid.*, pp. 128-9, p. 241
- 61) 内海和雄「スポーツ事故における傷害補償制度の国際比較研究 (4/4)—アマチュアリズムと「危険の引き受け」—」『広島経済大学 研究論集』第44巻第2号, 2021年11月, pp. 5-20
- 62) 内海和雄『イギリスのスポーツ・フォー・オール—福祉国家のスポーツ政策—』不味堂出版, 2003
- 63) Tony Collins (17), の p. 120
- 64) 内海和雄「スポーツ事故における傷害補償制度の国際比較研究 (2/4)—イギリスを対象に—」『広島経済大学 研究論集』第43巻第3号, 2021年3月, pp. 1-16